



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

三位一体の主日 B年 (2021年5月30日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：申命記 4章 32－34、39－40節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章 14－17節

福音朗読：マタイによる福音 28章 16－20節

テーマ：「アッバ、父よ」

三つの朗読から

第一朗読から味わえるのは、かつて関わってくださった神は、これからも関わってくださる、そんな神なのです。しかも、神の声を聞いて、滅びることがないのは、神からの一方的な恵みの結果です。その神は、選び出し、ご自身のものとしてくださる方です。ほかに神はありません。

わたしたち一人ひとりのこれまでの歩みを振り返ってみると、そこに神がおられ、神が人生を導いてくださったことに気がつくでしょう。いままでこれほどの恵みをくださった神ですから、これから先の人生でも神は豊かに交わってくださるはずですよ。

第二朗読では、聖霊よって、わたしたちがイエスさまと同じように「神の子」とされていく様子が記されています。神さまの子とさせていただいて、イエスさまと同じように「アッバ、父よ」と呼びかけて祈ることができる。これほどの恵みはないのです。

福音朗読では、疑う弟子たちの姿が描かれています。弟子たちは復活のイエスさまに出会っても、まだ信じられない。それでもイエスさまは弟子たちを宣教へと送り出します。ここに疑いが残っていても、宣教へと向かう中で、共にいてくださるイエスさまご自身が疑いを一つひとつ晴らしてくださるのです。宣教する中で、次第に信仰者へと変えさせてもらうのです。

説教

はじめて聖地巡礼に行ったときのことで。モスクワの空港で、テルアビブ行きの飛行機に乗り換ええました。乗客のほとんどが若い家族連れでした。若さあふれる機内で、わたしたちのグループ周辺だけが妙に年寄りくさかったのが印象的でした。

ロシアと東欧諸国にはユダヤ教徒の方々がたくさんいます。イスラエル建国の際にも、多くのユダヤ人たちが移住してきました。アシュケナージと呼ばれる彼らは、イスラエルとスラブとの間を取りもつ存在なのでしょう。二つの地域を自由に行き来できるようになったんだな、とわたしの前方に座っている幼い子どもたちを連れた家族を眺めていました。特に体格のよい若いお父さんの雰囲気、スラブの大地とパレスチナの大地で生きるたくましさ、力強さを感じさせました。

テルアビブに着いたら、巡礼の参加者の方がお一人、少し興奮気味にわたしに語りかけてきました。「神父さん、本当に『アッバ』っていうんですね。飛行機に乗り合わせていた子どもたちがお父さんに『アッバ』って、甘えていましたよ」。

ユダヤ人は家族のつながりを大切に作る民族です。とりわけ家長である父親の存在は重要です。家族の中心であり、家族の成員の仲介者でもあります。子どもたちは「アッバ」と親しげに呼びかけ、お父さんは子どもに全身で応えていきます。

今日の第二朗読には、「この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」(15節)とあります。神の霊がもたらす恵みの最たるものは、イエスがそうであったと同じように神に対して「父よ」と呼びかけられることです。しかも親しみをこめて「アッバ」と呼びかけられることです。「アッバ」は幼児語でした。子どもが信頼と親しさを込めて父親に呼びかけるときの言葉です。イエスが主の祈りを教えてくれたときも「父よ」(ルカ11章2節)で始まりました。おそらく、イエスは「アッバ」と呼びかけて祈り始めたのでしょう。また、ゲッセマニの園での祈りもそうでした(マコ14章36節参照)。

今日、お祝いする三位一体の神は、少し難しいです。しかし、イエスさまと同じように、わたしたちも神を「アッバ、父よ」と呼べるようにしてくださったのは、三位の神からの恵みです。

引き続き第二朗読は、「わたしたちの霊と一緒に」(16節)と語ります。一人ひとりの中に霊が働いています。その霊が聖霊のおかげで、人は神を「父よ」と自発的に呼び始めるのです。神を「父よ」と呼べるようになった人は、こんどは、聖霊ご自身がその人の中に宿り、イエスさまと同じように「アッバ、父よ」と叫べるようになるのです。こうして、人はイエスさまと同じように「神の子」とさせていただけるのです。

わたしたちは「神さま」と親しげに呼びかけます。祈りの中で。この呼びかけの中には「アッバ、父よ」という親しさが、「イエス」への尊敬があり、そして「聖霊」への懇願が含まれているのです。こうして、聖霊の恵みの中で、イエスさまのおかげで、人は父なる神へと向かっていくのです。